

「宝山寺への参詣道として

繁栄した中垣内越え道

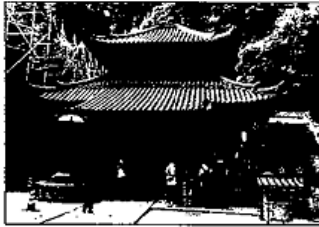


善宗寺から中垣内越え道(古堤街道)を東へ60メートルほど行くと、街道の分岐点に至ります。ここから其東へ向かう旧道は行き止まりとなつています。が北東方向に折れる新道は府道中垣内南田原線として現在も利用されています。分岐点には「すぐいこま道 左新道」「明治三十二年九月 生駒寶山寺 是令五十八丁 建石発起人 鈴木全」と刻まれた2基の道標が並んでおり、かつて中垣内越え道が生駒の宝山寺へ向かう参詣道として利用されてきたことがうかがえます。

宝山寺は別名「生駒聖天」ともいい、江戸時代から商売繁盛などを祈願する寺として知られていました。明治28年(1895)、片町と四條畷を結ぶ浪速鉄道(現在のJR学研都市線)が開通すると、多くの人が住道駅を下車し、徒歩や人力車で宝山寺へ詣でるようになりました。中垣内越え道では茶店や



現在の中垣内越え道



宝山寺の本堂(奈良県生駒市)



分岐点に立つ道標

料亭などが軒を連ね、大層にぎわったそうです。中垣内から龍岡へ抜けていく途中には国見峠という七曲の急坂があり、参詣客らは茶店で新しい草鞋や草履に履きかえ、笠や杖などを求めて、難所に備えました。また峠の手前には、特牛(たくましい牡牛)につけた太い綱をつかませて峠を越えさせるといふ珍しい商売もあったそうです。明治38年(1905)、地元住民らの請願を受けて、峻険な中垣内越え道の大規模な改修工事が大阪府によって行われ、国見峠を迂回する新道が整備されました。

大正3年(1914)、大阪電気軌道(現在の近鉄奈良線)の開通により、中垣内越え道を利用する人は次第に少なくなりました。新道と旧道の分岐点に立つ2基の道標は、往時の中垣内越え道の繁栄ぶりを今に伝える貴重な文化財といえます。

(生涯学習課)

「国見高地性遺跡

山上で営まれた太古の集落跡



中垣内越え道の分岐点から北東方向へ向かう新道(府道中垣内南田原線)は、阪奈道路上り線を横断した後、龍岡まで坂道が続きます。15キロメートルほど上がって行くと、再び阪奈道路と合流し、道路の向こう側(南側)に標高約213メートルの小高い山が見えます。この山は、明治17年(1884)編纂の「大阪府地誌」には「瀬戸の松山」という名で紹介されており、当時は山頂を境に中垣内村と龍岡村に分かれていたそうです。周りに視界をさえぎるものがない山々を見渡せる絶好の位置にあることから、古くから「国見」とも呼ばれていました。

明治11年の「大阪朝日新聞」の記事によると、瀬戸の松山の頂上付近で遊岡地の造成工事が行われた際、長さ7尺(約2メートル)、幅1尺5寸(約50センチメートル)の石棺があらわれ、中から人の骨や刀、腐食した鉛などが見つかったそうです。また「大東市史」には、昭和41年(1966)に山麓の標高約170メートル付近で宅地造成工事を行った際、弥生時代中期の高坏や流土、文土器片などが多数出土したと記載されており、後に当地付近は「国見高地性遺跡」と命名されました。弥生時代の集落は、初期には中垣内遺跡のような稲作に適した低地で営まれるのが一般的でしたが、中期から後期にかけて、日本列島で小国が分立し、たびたび戦乱が発生するようになると、定住に風さない高所でも集落が営まれるようになりました。このような不安定な社会情勢を反映して、国見高地性遺跡にも集落から人々が移住するようになってきたのかもしれない。

次回からは、龍岡地区の歴史と文化財を紹介します。

(生涯学習課)



龍岡への登り口(中垣内2丁目)



瀬戸の松山(大字龍岡)